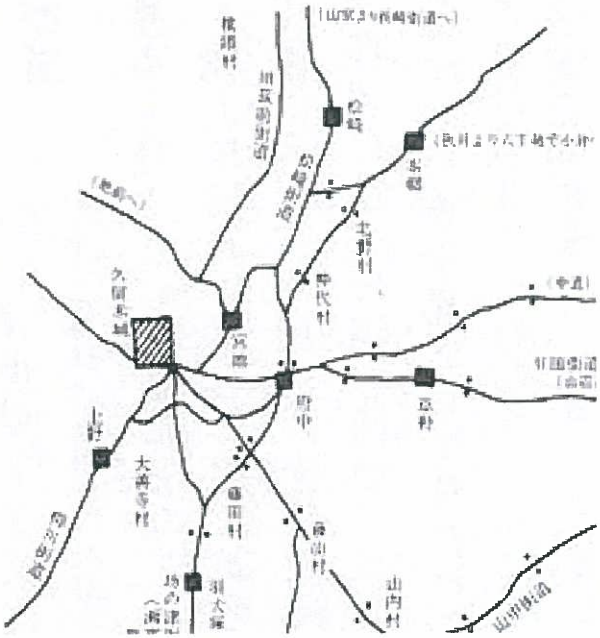
今村信徒発見の出来事（中心部分のみ）

1867年・(慶応三年)の始めには、旧筑後国今村で、キリシタンの一大集団が発見された。そのきっかけとなったのは、浦上城の越の紺屋が藍を仕入れるため、久留米地方に出かけて行ったことだった。たまたま今村にもキリシタンが潜んでいると聞き知り、早速ローケイニュ神父(Laucaigne)に伝えた。ローケイニュ神父は、中野の深堀徳三郎、土井の相川忠右衛門、上原の原田作太郎の三人に、今村を調査するよう勧められた。三人は大いにはりきってこのすすめに応じ、もう一人、道上の深堀茂一を加えて都合四人、2月23日、天主堂に行き、聖体を拝領した上で、喜び勇んで浦上を出発した。肥前（今の佐賀県）の多良から船に乗って筑後の若津（今の大川市の近く）へ渡り、陸路を経て、3日目の朝久留米の上手に当る府中についた。



府中から今村は程近く、早くも午前中に今村付近に着いた。茶店に寄って一休みして路を聞くと、西目の今村か、北目の今村かと尋ねるので、でたらめに西目の今村と答えた。そして教えられたまま茶店を出て歩きだした。たまたま

相川忠右衛門の草鞋の紐が解けた。一人だけおくれて紐を結び直していると、茶店に立寄っていた一人が「北目ならば、藍もあれば椎茸もある。西目は米のほかに何一つないのに、何のために行くのだろう」と話し出した。するともう一人が「いやあそこは変な処でな、昔はキリシタン宗、今は転び宗というのを奉じ、他村と縁の取結びもしないそうだ」と話した。聞くともなしに聞いていた忠右衛門は「さてはよいことを聞きこんだ。愈々それに違いない」と、走って三人に追ついてこの話を知らせて、相共に喜んだ。

やがて今村について路傍の家に入った。煙草の火を貰い、そのついでに話のいとぐちを求めようと思ったからだった。だがあいにくと留守で、火の気はあったが誰もいなかった。家の中を見廻したが、神棚もなく、仏壇もなく、門札さえもない。確かにキリシタンの家らしい気がする。しばらく待っても帰って来ない。やがて昼近くなった。小店を見つけて昼飯を頼み、座敷に上った。村の人々は長崎から怪しい男が入りこんだというので、男も女も老人も子供も、大勢寄り集って来て、様子をうかがった。四人は店の主人に一夜の宿を頼んだ。主人は驚いて強硬に拒絶した。

主人「ここ旅籠屋ではない。旅籠屋でないのに旅人を泊めると、旅人調から咎められても、申し開きが出来ない。府中に宿らっしゃれ。府中には傾城（遊女の意味）も居れば愉快もできる。そして用事があれば明日又お出

になったら、いいじゃありませんか」。

四人「そう言わずに、泊めて下さいな。できぬとおっしやるのに、強いてお願いするのは、ちと無理言うですけれども、それは、此処に懐かしいことがあるからです。ぜひ今夜は泊めて下さい。」

主人「いやできません。」

四人「そうおっしゃらず泊めて下さい。」

主人「どうしてもできません。」

と盛んに争って居る時、友次郎という人の姉で、本郷村の字古賀に縁付いている婦人が来合せた。

婦人「お前さん方はそんなに争って見たところで、とても解決できる話ではない。ぜひこの近付に泊りたいお望みならば、ちと遠方ですけれども、宅までお出でなさい。泊めてあげますから」

四人「どうぞそうして下さい」

四人は非常に喜んで後からついて行くと、今村の端に、女で男の髪結いをしている一銭屋がある。名をおシマと呼び、元来は天草の生れで、今村の平田新吉と云う人の妻となって居た。友次郎の姉もおシマとはかねてからごく懇意の間柄であったと見えて、通りがかりに、ちょっと立寄った。夫の新吉は外出中でおシマ一人しか居ない。浦上の四人をじろじろ見

て、友次郎の姉に尋ねた。

シマ「何処のお方ですか」

友次郎の姉「長崎のお方で、宿を貸すものがなく困りぬいて居られたから宅へ案内するところです」

シマ「古賀は遠方ですよ。ここに泊まってはどうですか。話があれば明日でも行かれますもの。旅人調が来る時は、私の兄弟ですと言っておきますさ。殊に宅は一銭屋ですから、いくらでも申開きはできます」とねんごろに言ってくれたので、そのまま厄介になることにした。時は午後の六時頃であった。

シマ「夕飯は炊きますか。」

四人「どうぞ。」

シマ「お菜は何にしませうか。鶏はどうですか。」

おシマもさるもの遠くから探りを入れた。なる程今村でも、いま悲しみ節をつとめているのだなと四人は思った。

四人「いや鶏は食べません。」

シマ「お好きではないのですか。」

四人「好かぬのではないが、今食べる時ではありませんから。」

シマ「そんなら卵はどうですか。」

四人「鶏も卵も一切食べません。食べてはならぬ時ですから。」

二人の婦人は、互いに顔を見せて、にっこり微笑んだ。四人は、この二人の婦人が、いよいよ切支丹に聞違いないと見てとったので、まだ内庭に立っている中に、コ

ンタツを一本づつ取出して二人に与え、座敷に上って遠慮なく、教の話を切り出した。すると二人も自分たちはキリシタンを奉じていると隠さずに打明けた。

今村の人たちは、浦上の四人が、おシマの一銭屋に泊ったと聞いて、好奇心にもえて大勢集って来た。おシマの狭い家は忽ち人山に埋った。今こそと深堀徳三郎たちは、老人たちに、キリシタンの教を説明し始めた。

しかし老人たちは、あくまで何もわからない様子をする。「どうした教で、どこから来たものかな」と尋ねるので、フランスの宣教師が伝えたキリスト教である、と御教の大要を説明したが、「変な教えでござるな、お経文はありますかな」と尋ねる。それで徳三郎は、「天に存す」「ガラサ(天使祝詞)」「ケレド(使徒信経)」などの祈りを誦えて見せたが、「妙なお経文もあればあるものよ。」と、全然わからない様子をして見せる。

聖絵や、聖像や、公教図解などを見せても、「わからぬ、わからぬ」と答えるばかりでどうしても、自分達の信仰をあらわさない。コンタツを取り出した徳三郎が、前もって手を洗わずにそれに触れると、仏教的見地から、「手を洗わずに珠数に触って罰があたりませんか」と気もちを悪くして見せた。

徳三郎は「ロザリオの珠には魂は宿っていない。手を洗わず触っても決して罰はあたらない。さあ皆さんも触ってごらんなさい」と差し出しても「いや触ると罰

が当ります」と言って老人たちは引揚げて行った。

今村の信者たちが、すぐに事実を打ち明けなかったのは、四人を隠密と思ったからである。然し、あとになっても、徳三郎たちは、そう云わなかった。

丁度慶応二年、幕府は第二回の長州征討軍を起こして失敗し、小倉藩兵の如きは長州勢に散々打ちのめされて、藩内におられず、九州各地に落ちのびて恐怖をまいていた時であった。浦上の四人が脇差をさして侍の姿をしていたため、小倉の浪人だと思ったからだ、と巧くお茶を濁したのである。おシマたち二人は軽々しく口走ったと云うので、老人達から散々叱られた。「こんな大事なことを、知らぬ旅人に打ち明けるということがあるか。女二人で今村を焦土にする積りか。あれを何と思っているか。長崎から来たなんて真赤なうそだ。実は隠密だぞ」と眼玉の飛出るほどきめつけられたのであった。

翌朝、四人は新屋敷に行って見ると、村の有志がずらり並んでいる。一夜静かに考えて疑念も晴れたものと見え、昨夜とはずいぶん様子が変っている。村の人たちは、「昨夜はあのように申しましたけれども、実は我々もキリシタン宗門です。然し長崎近在に同宗門の人が潜んでいるということは初耳でしたし、多少躊躇するところがあって、直ちに打明けなかったのです」と話し出した。小店の主人も来た。自分が四人を泊めなかったのも、小倉藩の浪人と思ったからで、旅人調が来るなんて、それは口実に過ぎなかった。尤も若い娘たちも、ずいぶ

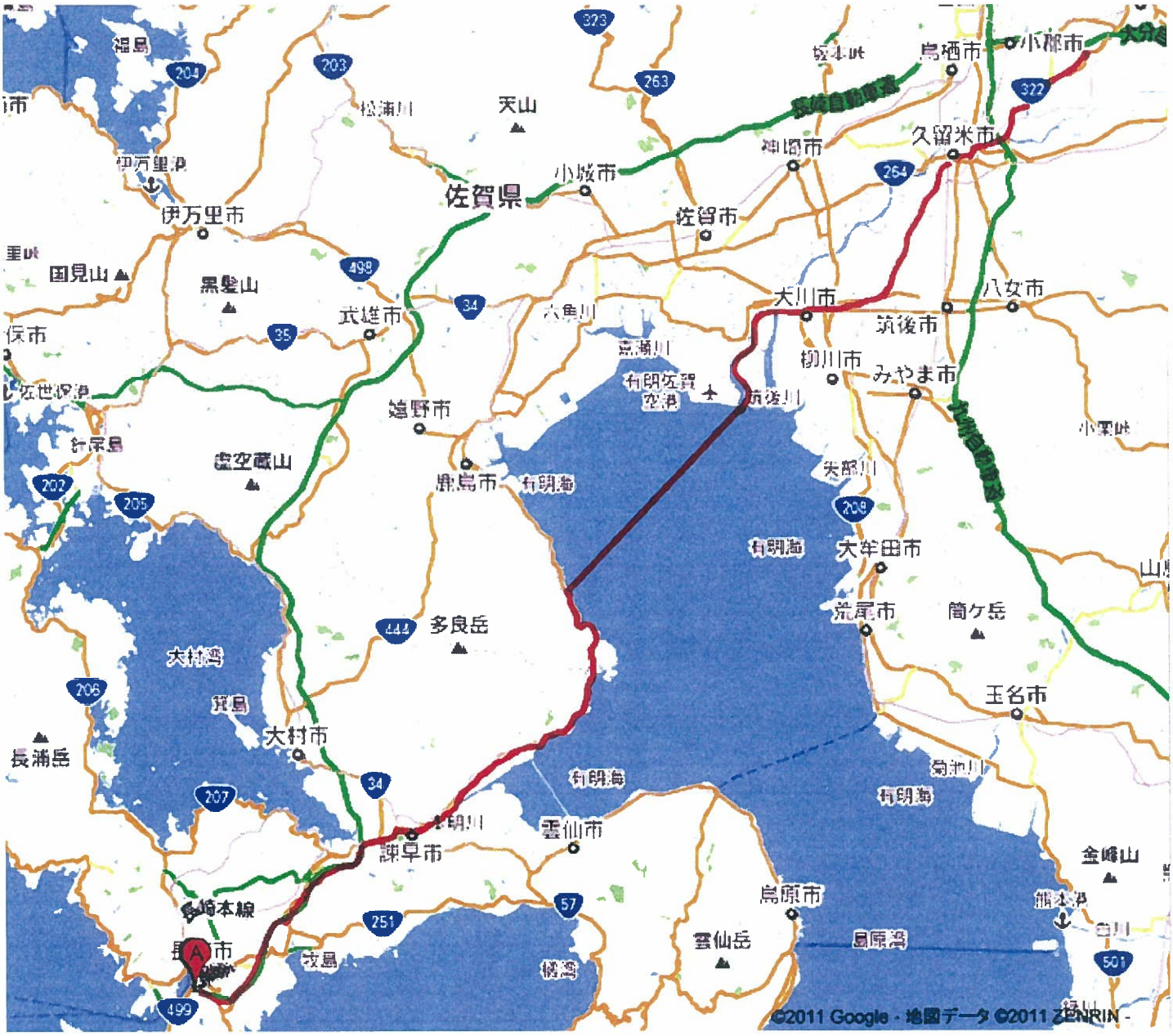
ん入って来たのに、四人の眼が少しもそれに移らなかったので、只人ではあるまいとは思ったが、見極めがつかなかったので断ったと打明け話をした。そこで徳三郎は、浦上の出来事、ローマから宣教師が派遣されて長崎に来て、浦上にも忍び入ったこと、浦上の信徒が熱心に聖教を学び、秘蹟をうけていることなどを告げて村人たちを驚かした。

四人の色々な話が事実であるか否かを見届けるため、今村から平田弥吉と信右衛門の二人を長崎へ遣わすことになった。然し信右衛門はすぐに出発できない事情があったので、徳三郎は原田作太郎一人を残して、平田弥吉は浦上の三人と四人連れで、長崎に帰り、事の次第を天主堂に行って報告した。一日おくれて原田作太郎は、平田信右衛門と浦上へ帰ったので、徳三郎は、今村のめづらしい二人の客を、中野の実家にやすませた。浦上の信徒は、これまで全く知らなかった遠方のキリシタンの代表者というので、二人を手厚くもてなした。後から来た信右衛門は、年の頃五十才ばかりの独身者で、婦人の煮た物一切、口にせず、祈りを毎日の仕事にしているという熱心家であった。

新しいキリシタンの集団を発見して、長崎では大喜びであった。神父たちは、平田弥吉と信右衛門とから今村のキリシタンについて、興味深い詳しい事情を聞いた。当時今村にはキリシタン約百戸ばかり、付近にも百戸ばかり、合計二百戸のキリシタンが、潜んでいた。三位一体のデウスを信じ、ジエズス・キリストを信じ、

定まった日には一緒に集って、ラテン語の「天に存す」「ガラサ」「キリエ・レソゾ」「痛悔の祈り」などを調える。聖母マリアが地上に六十三年間生活し給うた事を尊ぶ為に、ガラサを六十三回となえる習慣もある。一生涯不犯を守り、一身を祈りに委ねる婦人もいた。また浦上のキリシタンと同様に、水方、聞き役、帳方という教会の役職があったことなど、又前述したジョアン又右衛門の殉教などに関する一切の言い伝えなど、今村キリシタンの状況を、詳しくプティジャン司教(慶応二年十月司教叙階)に報告したのであった。

徳三郎は今村から来た二人のキリシタンを手厚く待遇し、長崎の教会などを見せた。然し信右衛門は、浦上のキリシタンが大勢集って、盛んに教を学んでいるのに驚いて、こうしていたら大事が起るに相違ないと恐れて、二日の後には今村に帰って行った。弥吉だけは尚暫く止まって教理を研究し、洗礼を授かつて今村に帰った。



今村探検については、浦川和三郎「切支丹復活」前篇 396～406 頁、浦川和三郎「浦上切支丹史」110～117 頁参照。

＊　４名のその後

・深堀徳三郎

中野郷　乙名　深堀久五郎の子、久五郎は資金を集め居宅前に秘密教会聖フランシスコ・ザビエル堂を建立。
徳三郎は 10 人の神学生とペナン神学校へ留学し、マラリヤに罹り死亡。遺骨が日本へ持ち帰られたかどうかわからない。
墓地：浦上地区には見つからず。

・相川忠右衛門

里郷字土井。旅から帰ってポアリエ(浦上初代の主任司祭)神父と相談して、土井に仮聖堂を建立した.
墓地：経ケ峰(杉本ゆり/潜伏キリシタン墓碑付近)。

注.　原塚神父(教区引退司祭)は、忠右衛門の子孫(孫?)と聞いている。

・深堀茂一

道上の茂一は、道上の茂市の誤りではないか。
茂市は里郷字道上の茂十郎の子。福山に流されたが、牢を脱出して各地流配者を励ましてまわった。
墓地：経ケ峰と推定される。

注１坂本の深堀泉氏の先組と推定される。

2.1997年(平成9年)の墓石調査当時墓碑名確認できなかった。

- 原田作太郎

上原は、現在の上野1付近。調査するも原田作太郎の情報なし。